

九五七）年、亀田町史編さんにもかかわった亀田中学校教諭（当時）田辺豊平氏が、亀田中学校郷土史クラブの生徒とともに砂崩遺跡の発掘調査を行った。その後も新潟東工業高校や新潟江南高校の社会科学クラブ・郷土史クラブなどによって踏査が行われ、これまでに縄文時代前期



図155 遺跡の中央にある神明社



図154 遺跡の位置
5万分1地形図「新潟」

砂崩遺跡 すなぐずれ 江南区砂山一・二丁目

砂崩遺跡は亀田砂丘の西寄り、旧亀田町と旧横越町の境界付近にある。現在は宅地化が進んでいるが、遺跡の周辺は標高一〇メートルほどあり、砂丘の地形がよく残っている。

砂崩（現砂山一・二丁目）及び周辺の砂丘上の集落には、戦前から遺跡のあることが知られていて、多くの郷土史研究者が関心を寄せていた。特に昭和元（一九二六）年ごろから、地元の佐藤常吉・藤田清次・成田幸三郎氏らにより遺物の表面採集が行われたという。このころに採集されたものには、石鏃せきぞくや未使用の石材類のほか、縄文時代中期中葉の深鉢形土器があり、縄文の模様の上にカマボコ状の隆帯をもつのが特徴である。

戦時中に入った天下火になった郷土史研究は、戦後の『亀田町史』の編さんがきっかけとなって再燃した。昭和三十二（一



図156 木目状の縄文(左)と、カマボコ状の模様(右)がある土器 個人提供

初頭の布目式土器(三八ページ)、縄文時代中期初頭の深鉢形土器のほか、手と足と首の部分が欠けている板状の土偶、石鎌、製作途中の石斧、砥石などが採集されているが、発掘調査は

行われていない。

砂崩遺跡で発見された布目式土器は、わずか一点の破片であるが、信濃川以东の砂丘部・平野部では最古の考古資料である。また、縄文時代中期の遺物が特に多いことから、この時期には亀田砂丘に暮らしていた人々の中心的な集落であった可能性がある。中期の土器のほとんどには竹を割ったような道具で付けたカマボコ状の模様や蓮華の花びらのような三角形の模様がある。この模様は主に北陸地方で一般的に見られるものである。また、木目状に縄文を施した東北地方の特徴をもつ土器も出土している。

当時の砂崩遺跡は北陸地方と東北地方の文化の交わる地域だったのであろう。